

[別紙 2]

審査の結果の要旨

氏名 蝦名 玲子

本論文は、クロアチア紛争激化地域で青少年期を過ごした女性たちの心理社会的脈絡における、首尾一貫感覚（Sense of Coherence, 以下 SOC と略す）の形成関連要因を、戦争ストレスへの対処と資源の動員の観点から質的縦断的に明らかにしたものである。

1991 年に勃発したクロアチア紛争前から現在までの心理社会的脈絡の中で、高い SOC 形成に関連したと考えられる人生経験及びその結果に対する考察のポイントは次の 4 点であった。

1. 幼少期の安定性

SOC の得点に関係なく、参加者のほとんどが戦時中、近所の人や学校の友だち、家族ぐるみの友だちや親戚から、民族の違いによる裏切りやそれによる失望を少なからず経験しており、こうした経験は、世界を信頼できるものとして見ることを、そして戦前のように他者を信頼することを難しくしていた。しかしそのような中でも、安定した幼少期を送った参加者は、少なくとも家族や、同じ民族の人や同じ状況にいる人を信じる傾向にあった。

その理由として、幼少期、安定していた人は、①安心基盤としてのアタッチメントが提供された、②その安定した環境において、新しい見知らぬ環境を探究するのに必要な存在価値（有意味感）を理解し、認知・行動する能力（把握可能感、処理可能感）を高める経験を積み重ねることが可能であった、③それにより高めの SOC の基礎が形成された、④その形成された SOC を用いて、青少年期にさらされた戦争関連ストレスに柔軟かつ適切に対応するのに成功した、⑤その度重なる成功体験を経て戦時下でも高い SOC の形成が可能となった、と考えられた。

2. 不確実性の処理

SOC の高い参加者は、戦争中の意味や見通しの見出せない事柄については、関心の外に置き、あえて考えないようにするとともに、努力をすれば生きがいを感じられるようなことに打ち込んでいる傾向にあった。また戦争や社会変化の結果もたらされた状況に失望しても、その状況や限界を受け入れ、新しい社会でできることや手に入れられるものに焦点を当て、満足できるように自分の考え方を適応させる傾向にあった。しかし愛する人の死など、関心の外には決して置けない大切な問題に対面したときには、使命を持つ等、自分にとっての意味を見出す、もしくは意味を捉え直す傾向にあった。

一般的に、有意味感を持ったうえでの一貫性のある体験は高い SOC の形成を促進するといわれているが、戦時下や戦後の動乱の社会においては、そこで起きている事柄に関心の外に置きあえてこだわらないことが必要な場合と、その事柄の意味づけをする必要がある場合があると考えられた。高い SOC を形成した参加者は、動乱の社会の中で起こる意味や見通しが見出せない事

柄については深く考えない一方で、愛する人の死など個人と密接に関わる重要な事柄については、それまでに形成された SOC を用いてしっかりと向かい合い、自分にとってのその事柄の意味を見出し、そうした対処経験が高い SOC の形成を促したと考えられた。

3. 自己の民族的なアイデンティティの受容

民族問題は、本紛争において、避けられない問題であるため、紛争中やその直後、クロアチア人以外の人種もしくは混血の参加者は、SOC の高低にかかわらず、差別やいじめを受け、その状況を改善しようと、クロアチア人の多くが信仰しているカトリック教を信仰し始め、クロアチア人のように行動していた。しかし SOC の高い参加者は、しばらくすると、自分の祖先や自分自身を受け入れたうえで、民族的なアイデンティティを確立する傾向にあった。

前述の通り、動乱の社会においては、そこで起きている事柄に関心の外に置きあえてこだわらないことが必要な場合もあるが、自己の民族的なアイデンティティといった個人の存在に関わる事柄については、それまでに形成された SOC を用いて自分にとってのその事柄の意味を見出すことが大切であり、それが高い SOC の形成を促したと考えられた。

4. 仕事の意味

失業率の高い当域では、就職している参加者は皆、就職できている現状に満足していたが、SOC 中高群の参加者は、仕事に対して、経済的安定以外に、喜びや満足感、人との出会いやつながりをもたらしてくれるもの、社会貢献、自信、という意味を見出していた。

本結果から、①雇用され、職務保障のある状況は、将来の見通しを持たせ、安心させ、それが把握可能感を高めた、②人間関係が軸となる「資源が活用できる」という感覚は、過大負荷がかかっても、対処できると思わせ、それが処理可能感を高めた、③「自分の仕事は、楽しみ、社会的貢献、自信、満足感、社会的つながり、良い人間関係を与えてくれるものだ」と思えると働きがいを感じ、それが有意味感を高めた、という一連の人生経験を、1日の大半を占める職場で繰り返し持つことで、戦後の再建期から現在にかけての SOC が、維持・向上されていたと考えられた。

以上、戦争ストレスへの対処と資源の動員の観点から SOC の形成関連要因を明らかにした本研究は、戦時下の青少年の人生経験と SOC 形成との関連を描いた世界初のものであり、またクロアチア紛争激化地域をはじめ Post-conflict 地域において WHO ヘルスプロモーションで重要視されている SOC の形成・向上の取り組みに貢献をなすため、学位の授与に値するものと考えられる。